

胆石、胆嚢癌とその他の消化管癌—ミネソタ州ロチェスターにおける疫学的調査

Gallstones, gallbladder cancer, and gastrointestinal malignancies—An epidemiologic study in Rochester, Minnesota: *Maringhini A, et al* (Ann Intern Med 107: 30-35, 1987)

胆嚢癌患者が胆石を高率に有していることは古くから知られており、胆石は胆嚢癌発生の危険性と関連があると報告が多い。胆石あるいは胆摘と大腸癌との関連も言われているが議論の多いところである。更に、胆石と他の消化管癌との関連は依然不明である。

著者らはこれらのことを明らかにするためにロチェスター在住者で

1950年から1970年の間に胆石と診断された2,583名を対象にprospectiveな追跡調査を行った。胆石の診断は、無機能胆嚢の有症状者は1点、1回以上の腹痛発作や黄疸は2点、胆道造影あるいは手術や剖検での胆石確認は3点を与えるスコア方式をとり、3点以上を胆石例とした。

胆石例の2,583例中69例に悪性腫瘍の発生をみ、その病巣数は72であった。累積癌発生予測値は推計学的に76と算出されており、癌発生の実数は予測値より少ない結果であった。胆嚢癌は予測値の3倍発生していたが、男性患者での胆嚢癌発生が有意に高い結果で、女性患者では有意差はなかった。また、胆嚢癌発生の実数は13.3年に及ぶ経過観察で2,583例中わずか5例にすぎなかった。他の消化管癌との関連は大

腸癌を含め有意の相関は認められなかった。

したがって、この研究では胆石症と胆嚢癌との関連については支持する結果が得られたが、長期間にわたる調査でも胆嚢癌の発生実数が極めて低いことから、胆嚢癌の予防目的の胆摘や胆石溶解剤の投与は推奨しないと著者らは述べている。更に著者らは、胆石と胆嚢癌との強い関連を主張している従来の報告は剖検例や手術例に基づくretrospectiveなデータで母集団の設定にかなり選択性があることを指摘している。本研究は初めてのprospective cohort studyであり、意義深い報告と思われる。

(愛知県がんセンター消化器内科

山本恵祥 抄)

Crohn病患者の生活の展望と質

Life prospects and quality of life in patients with Crohn's disease: *Sørensen VZ, Olsen BG, Binder V* (Gut 28: 382-385, 1987)

慢性疾患を有する患者は将来の生活に危険を感じ、不安感がときどき状況を悪化させる。以前、著者は慢性疾患の代表である潰瘍性大腸炎患者の社会的予後に関する報告をしたが、今回はCrohn病患者で彼らの生活実態を調査報告している。

106人のCrohn病患者と面談して家庭、社会、および職業生活について調べ、この結果を入院28日以内の急性疾患患者と、年齢、性をマッチさせたうえで比較した。

対象となったCrohn病患者は平均年齢44歳、男/女: 1.5、病悩期

間は1年～32年(平均9年)、手術経験者は74例70%で2度以上は44例41%である。調査時、活動期の患者は46名44%、非活動期の者は60名56%であった。約半数が小腸大腸型であった。対照患者は肺炎、扁桃腺炎、卵管炎、尿路結石などであった。

結婚率は患者群67%、対照群72%で差はなく、子供を有する率も両群で差はなかったが、患者群で子供の数が少なかった。家や性の問題および飲酒、喫煙で違いはみられなかった。

文化活動、スポーツ、教育、および友人付き合いで表される社会的スコアは両群で有意差はなく、高度の社会活動がなされている。また、運動、球技、自転車、および歩行で示される肉体活動も両群、同じレベル

であった。

国立社会研究所の規定による社会経済状態では患者群でやや、しかし有意に高かった。就業率、失業率は両群で差はないが、Crohn病患者は5年以上同じ仕事についている率が高い。けれども患者群で失業保険の必要な人がわずかにみられた。

以上から、著者は次のように結論している。定期的な管理と治療によってCrohn病患者は良好な予後と良質な生活を送っているが、約半数の患者が再発増悪時は家庭生活や仕事がおびやかされ、およそ20%が以前に比較し仕事量や余暇活動の減少を訴えている。

(愛知県がんセンター病院消化器内科

松浦 昭 抄)